

13: 成人 T 細胞白血病リンパ腫(ATL)

1. WG メンバーリスト

氏名	所属	診療科
責任者 吉満 誠	鹿児島大学大学院 医歯学総合研究科	血液・膠原病内科学
石田 高司	名古屋大学大学院医学系研究科	分子細胞免疫学
宇都宮 與	公益財団法人慈愛会 今村総合病院	血液内科
加藤 光次	九州大学病院	血液・腫瘍・心血管内科
鈴宮 淳司	社会医療法人駿甲会 コミュニティーホスピタル甲賀病院	血液内科・内科
東梅 友美	山形大学大学院医学系研究科	内科学第三講座血液・細胞治療内科学分野
中瀬 浩一	愛媛県立中央病院	血液内科
名和 由一郎	愛媛県立中央病院	血液内科
菱澤 方勝	京都桂病院	血液内科
福島 卓也	琉球大学医学部	保健学科病態検査学講座血液免疫検査学分野
和氣 敦	国家公務員共済組合連合会 虎の門病院分院	血液内科
崔 日承	独立行政法人国立病院機構 九州がんセンター	血液内科
朝倉 義崇	沖縄県立中部病院	腫瘍・血液内科
中野 伸亮	公益財団法人慈愛会 今村総合病院	血液内科
藤原 弘	三重大学大学院医学系研究科 個別化がん免疫治療学分野／三重大学病院 血液内科／三重大学 複合的がん免疫療法研究センター	
町田 真一郎	東海大学医学部付属病院	血液腫瘍内科
澤山 靖	長崎大学病院	血液内科(原研内科)
井上 明威	熊本大学病院	血液内科
今田 和典	大阪赤十字病院	血液内科
吉田 功	独立行政法人国立病院機構 四国がんセンター	血液腫瘍内科
藤 重夫	地方独立行政法人 大阪府立病院機構 大阪国際がんセンター	血液内科
福田 隆浩	国立がん研究センター 中央病院	造血幹細胞移植科
進藤 岳郎	京都大学医学部附属病院	血液内科
徳永 雅仁	公益財団法人慈愛会 今村総合病院	血液内科
村主 啓行	京都大学医学部附属病院	血液内科
森島 聡子	琉球大学病院	内分泌代謝・血液・膠原病内科学講座(第二内科)
友利 昌平	琉球大学病院	内分泌代謝・血液・膠原病内科学講座(第二内科)

清水 拓也	京都大学医学部附属病院	血液内科
森田 真梨	京都大学大学院医学研究科	血液・腫瘍内科学
伊藤 歩	国立がん研究センター 中央病院	造血幹細胞移植科
北尾 章人	神戸大学医学部附属病院	腫瘍・血液内科
坂本 光	長崎大学病院	血液内科(原研内科)
武田 航	国立がん研究センター 中央病院	造血幹細胞移植科
田中 喬	国立がん研究センター 中央病院	造血幹細胞移植科
藤野 聡司	公益財団法人慈愛会 今村総合病院	血液内科
牧山 純也	(地方独立行政法人)佐世保市総合医療センター	血液内科
阿久澤 有	獨協医科大学埼玉医療センター	糖尿病内分泌・血液内科

2. 会議開催記録(2021 年 1 月-12 月)

日時	場所	会議内容
2021 年 2 月 5 日(第 28 回)	リモート会議	「染色体異常が ATL に対する同種移植成績に及ぼす影響」の二次調査について中野先生より論文受理の報告。井上先生「ATL における移植前処置に関する検討」、「ATL 移植における ATG による GVHD 予防の意義」、徳永先生「近年の ATL における臍帯血移植の成績向上とその位置づけ」、森島先生「ATL における HLA の意義」、友利先生「急性白血病・悪性リンパ腫と比較した、ATL の移植における合併症の特徴」、宇都宮先生「ATL に対する自家移植」と各先生より、研究の進捗状況についてご報告頂いた。(参加数 17 名)
2021 年 9 月 17 日(第 29 回)	リモート会議	「ATL における移植前処置に関する検討」について井上先生より論文受理の報告。「ATL に対する自家移植」について宇都宮先生より論文受理の報告。井上先生「ATL 移植における ATG による GVHD 予防の意義」、徳永先生「近年の ATL における臍帯血移植の成績向上とその位置づけ」、森島先生「ATL における HLA の意義」、友利先生「急性白血病・悪性リンパ腫と比較した、ATL の移植における合併症の特徴」と各先生より、研究の進捗状況についてご報告頂いた。井上先生より「ATL 移植のセンターエフェクトに関する研究」を提案頂いた。(参加数 17 名)

3. メーリングリストによる意見交換 (メーリングリスト開設から 2021 年 12 月末時点まで) (2992)回

4. WG の今後の活動方針・抱負など

2021 年は、打ち合わせ会を 2 回、リモート開催した。論文 2 編、学会発表 1 演題であった。

近年 ATL への新規薬剤が複数承認されているが、依然同種造血幹細胞移植は唯一長期寛解の望める治療法である。これまで本 WG では TRUMP データを用いて、「寛解期」に「早期」に移植を行うことが有効であること、「再発期」や「移植後再発」は極めて予後不良であること、「軽度の GVHD」を有することが予後良好であること、「前処置の治療強度」の治療成績への影響は限定的であること、「臍帯血移植」は他のソースに比較して予後不良であること、「移植時併存症」は HCT-CI を用いることが有用であること、「CMV 再活性化」が予後不良因子であることを発信してきた。

2021 年にはこれまで症例報告と review of literature のみで予後不良とされていた ATL における「自家移植」が予後不良であることを報告し、既存の化学療法の限界を改めて示した。また「ATL における移植前処置」についてこれまでの RIC/MAC の比較であったものを薬剤毎に比較検討でき、今後の診療に有用な情報が得られた。現在は「高リスク HLA の同定」、「ATL と AML/ALL における移植時合併症・再発の違い」、「HLA 不一致移植の成績」、「近年の臍帯血移植の傾向」、「ATL 移植とセンターエフェクト」、「近年における移植前モガムリズマブ使用と予後」について TRUMP データ・二次調査を用いてのみ解析可能なクリニカルクエスチョンに対して検討を進めている。今後も ATL に対する移植治療の最適化を目指す研究を進めていきたい。